

豊山学報・第六六号  
弘法大師御生誕千二百五十年  
記念特別号 抜刷  
令和五年三月発行  
真言宗豊山派総合研究院

『豊山玉石集』  
にみる長谷寺と密教

堀内規之

## 『豊山玉石集』にみる長谷寺と密教

堀内規之

### 一、はじめに

真言宗豊山派の総本山である長谷寺は、派祖・専誉僧正が入山してから密教寺院として、その歴史を歩んだと一般的に認識されている。しかし、実際江戸時代に豊山長谷寺で生きた人々は、この点についてどのような考えていたのだろうか。それを、江戸時代に編纂された『豊山玉石集』によつて確認していきたい。

### 二、『豊山玉石集』と祐蔵について

当該書は、菅原道真の真筆とされる『長谷寺縁起』を仮名書きで、当該書冒頭に示し、その後に観音堂をはじめとする長谷寺山内外の諸堂や年中行事、諸国に点在する長谷寺という名称の寺院紹介等を記したものであり、地・水・火・風・空・識の六卷から構成されている。『豊山玉石集』における記述や先行研究によれば、当該書は祐蔵という学僧の手によるものであり、未完成のまま長谷寺二十四世能化である信恕に提出され、こ

れに信恕が書き入れをしている。これが祐嚴のもとに返却されたかは甚だ不明であるが、祐嚴の弟子である春祥房融範が入手している。さらに、この融範が書き入れを行い、四十九世通済能化に提出され、これにまた通済も書き入れをしているというテキストである。

現在『豊山玉石集』は、『続豊山全書』第十八巻に収録されており、他の活字化されたものとしては、大正六年（一九一七）八月十日に、編集兼発行人網代智明・吉田深了、発行所長谷寺事務所として出版されており、すべて総ルビ付きのものである。大正六年出版『豊山玉石集』では、当該テキストの撰者である祐嚴について、東京都中野区・宝仙寺所蔵の祐嚴像を写真掲載し、次の様な文章を付している。

祐嚴法印は今を距る一百三十二年前、天明六年八月二日宝仙寺内の玉泉寺に入寂せられ、此像は宝仙寺中の常光明真言堂（通称大師堂）に安置せらるゝものなり。宝仙寺にては秋の土砂加持は祐嚴法印入寂の日を記念せんが為め八月二日に修行せられ、其日には此尊像の前に施餓鬼を修行するの例なりと云ふ。今は一ヶ月後の九月二日に秋の土砂加持修行せらるるが四隣の善男善女参拝するもの最も多し。<sup>(1)</sup>

と、当時祐嚴が天明六年（一七八六）に入滅した宝仙寺において、祐嚴像を前に、その遺徳を偲んで土砂加持法会が修行されていることが示されている。では、その祐嚴とはどのような学僧であったのであろうか。ここで弟子である融範の記述をみてみたい。すなわち、

師。字鳳観。諱祐嚴・武州葛飾郡二郷半領采女新田邨。加藤氏之産。享保十九<sup>甲寅</sup>年登当山。累功之後。住長勝寺及月輪院又宝曆十四之夏。移住武野宝仙寺韜光之後<sup>天明元</sup>。寂于同地中常光明真言堂。年七十又六。<sup>延享十八年</sup>

天明六<sup>丙午</sup>年仲穉初二日也。

豊山金蓮院 春祥融範謹誌<sup>(2)</sup>

と『豊山玉石集』の裏表紙の裏に、融範が記している。これによると、祐厳は武蔵国葛飾郡の加藤氏の出身で、享保十九年（一七三四）、すなわち二十四歳の時に長谷寺に登っている。『傳法立義交名記』によれば、宝暦六年（一七五六）から宝暦十三年（一七六三）にいたるまで次の様な諸役を勤めていた。

宝暦六年九月六日 伝法会

探題 信恕

読師 祐厳 鳳観房

宝暦七年九月六日 伝法会

探題 信恕

唄師 祐厳 鳳観房

宝暦八年九月六日

探題 信恕

散華 祐厳 長勝寺  
鳳観房

宝暦九年九月六日 第二会 伝法会

探題 信恕

竖問役 祐厳 長勝寺  
鳳観房

宝曆十年九月五日 伝法会

探題 性海

竖問役 祐蔽 長勝寺  
鳳觀房

宝曆十一年九月五日 初会 伝法会

探題 性海

精義 祐蔽 月輪院  
鳳觀房

宝曆十一年九月六日 第二会 伝法会

探題 性海

聴衆 祐蔽 月輪院  
鳳觀房

宝曆十二年九月五日 初会 伝法会

探題 性海

講師 祐蔽 月輪院  
鳳觀房

宝曆十二年九月六日 第二会 伝法会

探題 性海

会始 祐蔽 月輪院  
鳳觀房

宝曆十三年九月五日 初会 伝法会

探題 性海

会始 祐蔽 月輪院  
鳳觀房

宝曆十三年九月六日 第二会 伝法会

探題 性海

会始

祐庵

鳳月輪院  
鳳觀房 (3)

この記述によつて、祐庵は宝暦十年（二七六〇）までは長勝寺に住していたことが示されている。この長勝寺は長谷寺の塔頭寺院であり、『長谷寺脇寺記録』によると第十九世信有能化の代に寺号がつけられたとし、「表行三間。別二掛三間二九尺。仏間七畳廻り縁共二」<sup>(4)</sup>という。そして、宝暦十一年（二七六一）には山内の月輪院に住し、宝暦十四年（二七六四）夏に移転寺である中野・宝仙寺第二十六世住持に就任している。このように長谷寺における伝法会の諸役を勤めていることを鑑みれば、祐庵の学識は高く評価されていたと考えられよう。

その祐庵が著した『豊山玉石集』とはいかなる著作であろうか。これについては、

◎林 亮勝 「『豊山玉石集』について」・『續豊山全書刊行会会報』第二号・昭和四十六年六月

◎榎田良洪 『續豊山全書』解題『豊山玉石集』・昭和五十五年三月

によつて報告がなされている。ここでは、林亮勝「『豊山玉石集』について」の記述を概観してみたい。すなわち、

※『豊山玉石集』は、小池坊二四世能化信恕が宝暦十年（二七六〇）三月に、月輪院の鳳観祐庵に命じて著作させたもの。

※信恕は早くから長谷観音の靈験を誤りなく世間に伝えて信仰心のあるものの「手鏡」にしたいと考えていた。それが実現できなかつたので、自分に代わつてこれを書けと祐庵に命じた。

※祐庵は、同年六月上旬に筆を起こし、九月中旬に稿を終え、信恕に提出した。

※草稿を受け取つた信恕は、各巻に奥書を書き、意に染まぬところは訂正している。

さらに、『豊山玉石集』第三卷「火巻」の末尾に次の様な記述があることを指摘されている。すなわち、

信恕僧正親跡にて。第一の巻の表紙に。地水火風空識と直毫見えたり。我師の元意ハ豊山玉石集と名くへしと思ひき。然る間。能満院求聞堂の記清書あり。玉石集と既に名けてあり。よりてまた改めて玉石集とするものならず。予暫豊山名霊集と名るも。師の意委くしりかたき故也。求聞堂の記を見て本名に改め替る也。<sup>(5)</sup>

この記述からすると、現在『豊山玉石集』と称している書物は、当初書名がなかったというのである。さらに、能満院求聞堂の部分のみが独立して、「玉石集」と名づけられていたという。そのため、一時的に「豊山名霊集」と名づけたものの、後に『豊山玉石集』と改めて名付けたというのである。

### 三、『長谷寺縁起』における密教的記述について

前述のように当該書は、冒頭に『長谷寺縁起』を引用している。この『長谷寺縁起』は、菅原道真が長谷寺の縁起を書いたという体裁をとっている、いわば道真仮託の書である。『長谷寺密奏記』や『長谷寺靈験記』よりも早い成立、すなわち平安時代末から鎌倉時代の成立と考えられている。『豊山玉石集』所載の『長谷寺縁起』は、後円融天皇が仮名書きしたものを転写したものであり、菅原道真真筆の『長谷寺縁起』は小池坊宝蔵に納められていると、『豊山玉石集』は伝えている。現在、総本山長谷寺には室町時代と思われる写本も存在しているという。すなわち、専誉の長谷寺入山以前の成立であることは揺るぎもない文献であるが、『豊山玉石集』

における密教的表現、さらにはこの『豊山玉石集』における様々な記述の典拠として、次のような記述が『長谷寺縁起』にはある。

① 当山は是。三世諸仏転法輪の地。菩薩・聖衆利生砌也。

② 此山は即秘密莊嚴の土。群仙窟宅の地也。一瞻一礼の輩ハ。なかく三悪趣をはなれ。二世の願を成する也と云々。

③ 此土の秘密莊嚴せるをみむとおもふ。童子答云。是肉眼の及所にあらず。た々上人両部の三磨（摩）地に入へしといふ。即詞に随てその三昧に入。山内みな密嚴の土にして。両部の諸尊弥輪せるを拝見し奉。

④ 今此伽藍開發の一途は。常の儀あらず。道場といへは諸仏転法輪の地。秘密主の土。三際壞劫にも動へからず。四魔・靈鬼も威をうしなふ砌なり。<sup>(6)</sup>

この縁起文には、長谷寺の地が勝地であることを説き示すにあたって、「秘密莊嚴の土」「密嚴の土」「両部の諸尊弥輪せる」という表現を用いている。これらは直接的ではないが、長谷寺の地が大日如来の地であり、両部曼荼羅の地であることを十分想起させる表現である。すなわち、この『長谷寺縁起』が成立した段階から増幅がなかったとするならば、『長谷寺縁起』の成立年次とされる平安末から鎌倉時代において、長谷寺あるいは『長谷寺縁起』の撰者に密教的素地があつたことは否定できないであろう。

そして、この縁起文に続けて『豊山玉石集』では菅原道真の言葉として、次の様な逸話を示している。すなわち、寛平二年（八九〇）三月、宇多天皇が道真に徳政の計を尋ねられた。道真は、仏法を崇め、神を敬い（『統豊山全書』は宗、大正六年本は敬）、聖跡を興し、賞罰を正しくする。この四箇条であると、宇多天皇に奉答した。天皇は、

聖跡はいずこぞと重ねて問われた。道真は鎮護国家の霊場は十八箇所あり、就中長谷寺は、

開天已来の勝地。神明発願の精舎。濫觴世にこえ。利生無双<sup>(7)</sup>。

であると答えたとしている。

『長谷寺縁起』と『豊山玉石集』の記述とその意図を勘案すれば、菅原道真の考えとして密教的素地が長谷寺には古来より存在していたことを示し、その上に鎮護国家の霊場であり、神明発願の精舎が、長谷寺であると位置づけている。この位置づけが、この後に続く『豊山玉石集』の記述すべての裏付け、権威付けとなつていくことは明らかであろう。

#### 四、『豊山玉石集』にみる密教的なもの

先ず、『豊山玉石集』では聖武天皇による東大寺大仏造営に関わる伝承を述べている。すなわち、伊勢の皇大神の本地を知るために、行基と橘諸兄を勅使として使わしめたところ、その時に皇大神が日輪の形を現したという。この日輪は大日如来であり、天皇はこの意を受けて造立せよという神託を受けたという。よつて、大日如来を造立し、東大寺の本尊とした。また、西大寺の浄覚が参籠した時に、「第一義天金輪王。光明遍照大日尊」と告げられたこと、これらのことにより、世人はみな大日如来が大神宮の御本地であることを承知しているというのである。

ここで述べられている内容は、『太神宮諸雑事記』に述べられていることを基としてしていると指摘できよう。『太

神宮諸雜事記』は、古代伊勢神宮の重要事件を記した全二巻のテキストである。編年形式で、垂仁天皇二十五年（前五）の天照坐皇太神の鎮座より延久元年（一〇六九）までを記録したものであり、編案時代後期の成立とされている。その『太神宮諸雜事記』一の天平十四年（七四二）十一月三日には、次のような内容が示されている。すなわち、橘諸兄が勅使として伊勢神宮を参拝し、天皇御願寺の建立のことを祈申した。勅使帰参の後に、

天皇之御前仁玉女坐。即放金色光天宣。本朝和神国也。可奉欽仰神明給也。而日輪者大日如来也。本地者盧舍那仏也。衆生者悟之。当帰依仏法也。御夢覺之御道心弥発給<sup>天</sup>。件御願寺事於始企給<sup>音</sup>。

と金色の光を放つて神が現れ、日輪は大日如来であり、天照大神の本地は毘盧遮那如来である。衆生はこのことを悟っており、仏法に帰依しなさいと告げられたというのである。『太神宮諸雜事記』が成立して平安時代後期には、大日如来と天照大神との関係をこのように捉えていたことは確認しておくべき事項であろう。

さらに、『豊山玉石集』では徳道上人が皇大神の本地を崇め奉らんとして、伊勢の五十鈴川の磯の宮に百日参籠した。その満願の日、天武天皇十年（六八二）九月十五日の夜、蒼天、ことに雲はれて、月光さらに朗らかであった。社の前に日輪が現れ、その中に金色の十一面観音が光を放ちながら現れた。徳道上人は、この奇瑞によつて本地を知ることができた。さらに、徳道上人は重ねて垂迹の形を拝したいと念じた。すると、常ならざる貴婦人の形を顕し、笑みを含んで告げたという。

汝我か本地を知らんと思はば、能く我が言を思へと。

我本秘密大日尊

大日日輪観世音

観音応化日天子

日天権迹名日神

此界能救大慈心

所以示現観世音<sup>(9)</sup>

という神勅を得たという。この日輪が現れた伝承は、まさに法然房源空（二一三三〜二二二二）が、浄土宗開宗に際して念仏弘通を伊勢皇大神に祈念するため、内宮に参拝すると日輪のなかに「南無阿弥陀仏」の名号が現れたという伝承とほぼ同じものといえよう。そして、「大日日輪観世音」に続く七言六句の偈頌については、次の様な解釈が示されている。

大日如来・観自在尊・日天子・天照神只本迹の異にみにて同体なることを。故に当山ハ衆生の機縁に応して。

一門の観世音の形を示し給ふ時ハ。即観音の浄土。補陀落山なりといとも。普門を改めさる一門の尊なるか故に。観音即大日如来にして。全大日如来の浄土。密厳国土なり。行基菩薩両部の三摩地に入。山内皆

密厳の地にして両部<sup>願</sup>の諸尊。弥輪し玉ふを拝見し奉りしといふ。<sup>(10)</sup>

ここで言う日天子は、後述する瀧蔵権現のことであり、虚空蔵菩薩求聞持法における伏線として語られているが、重要な点は大日如来（『観世音菩薩』）と天照大神が同体である故に、長谷寺が大日如来の浄土であり、密厳国土であると規定している点である。そして、『長谷寺縁起』において行基菩薩が、

山内みな密厳の地にして両部の諸尊弥輪し玉ふを拝見<sup>(1)</sup>

されたという記述が、長谷寺が大日如来の浄土であり、密厳国土である所以を示しているという。さらに、『豊山玉石集』の記述では、

川の東の與喜山ハ大初瀬。即胎藏界の曼だら也。川の西の観音山ハ小初瀬。是金剛界の曼だらなり。故に一度此山に入者ハ。即両部海会に入れる也。<sup>(12)</sup>

また、

当山即大日如来の浄土。密厳国土にして。天照大神本有常住の霊場なること疑ふへからず。<sup>(13)</sup>

と與喜山から観音山の一体を両部曼荼羅として、長谷寺の寺域に入る者は両部曼荼羅に入ることの意味しているという。そして、その曼荼羅世界は大日如来の浄土である密厳国土にして、天照大神が常におわします霊場であると長谷寺を規定している。さらに『豊山玉石集』の別の箇所では、もう少し與喜山と観音山について詳細に述べられている。

一、與喜山。初瀬川の東なる山。東北の隅より西南の角。太刀雄社辺に至る迄をいふ。古歌に大泊瀬といふハ此山をさすなり。古記に因万荼羅峯といふ。是胎藏界の諸尊森羅として座して。密厳国土・本有常住の霊場なり。

一、観音山 初瀬川の西方の峯也。是亦良の隅より坤の間。豊秋津姫の社に至る迄なり。（中略）古歌小初

瀬といふハ此山なり。是即西方果方たらにして。金剛界九会の聖衆。星辰の如に法然として座列し玉ふ。華藏世界なり。<sup>(14)</sup>

この引用文に示されている「古記」とはどのようなテキストを指しているかは全く不明であるが、興喜山が因曼荼羅・胎藏界曼荼羅、さらには密嚴国土として認識されていたこと、そしておそらく同様に觀音山が果曼荼羅・金剛界曼荼羅、そして華藏世界であると配当されていると推測される。この密嚴国土・華藏世界を、両部曼荼羅に配当することは、興教大師教学によつて示されていることであり、長谷寺の寺域を二つの山<sup>||</sup>二つの世界が不二の曼荼羅とすることによつて、大日如来「本有の靈場」たらしめようとする意図が示されていると捉えることができよう。

そして、これはなによりも『長谷寺縁起』において八大童子が徳道上人に告げたという、

一度『統真言宗全書』は「も」が入る。此山に入る者をハ。生々に加護して。終に淨利に送り。長く此山に住せむ者をは縦行ゆるく共。我添て勇を生せしめむ。<sup>(15)</sup>

という記述、さらには、

此山は即秘密莊嚴の土。群仙窟宅の地也。一瞻一礼の輩ハ。なかく三惡趣わはなれ。二世の願を成する也。<sup>(16)</sup>

が、長谷寺を曼荼羅世界とする証左となり得ていると考えられる。長谷寺の寺域に入る者が三悪趣を離れて、淨利に送られるということが、曼荼羅に入ることという具合に、淨利が曼荼羅世界と交換されて提示されている。また、古来より與喜山は大泊瀨山と称され、天照大神が天上から始めてこの地に降臨された聖地とされ、また大和国に最初に太陽が昇ってくる聖地であるとも考えられていた。このような聖地を曼荼羅として、大日如来の淨土、そして天照大神がおわします霊場として位置づけているのである。

さらに、『豊山玉石集』では弘法大師と天照大神の関係を次の様に示している。

大師即日天子にて。大神宮と同一体にて御座ことハ。大師曾て真雅闍梨に告て曰。我不二入定之後。日輪觀に入て。伊勢高天殿に在て衆生を利すへしと。若同体にあらずんハ。あに日宮に居し。大神宮と並座することを得んや。日輪大師と号して。大師日輪の中に座し玉ふ御影ハ。此深旨を顕はし奉る也。<sup>(17)</sup>

すなわち、弘法大師が実弟の真雅（八〇一〜八七九）に対して、「不二入定」の後に日輪觀に入つて、伊勢高天殿に在つて衆生を利益すると語つたというのである。これは、天照大神と大師が同体であるからこそ、「日宮に居し、大神宮と並居」することが可能であるとしている。そして、弘法大師の御影の一つの様式である「日輪大師」のお姿は、この天照大神と大師が同体であるという深旨を示しているという解釈を施している。また、大師の遍照金剛という金剛名についても、次の様に天照大神と同体の証としている。

又大師を遍照金剛と申奉る。是舊事本紀にはゆる天照天神。又名ハ日徧照尊といふと同名にして。同体の証拠也。況又大師親り皇大神より神道の奥旨を伝ひ玉ふ。御流神道といふハ是なり。旁以御同体なるこ

と分明なり。然ハ天照大神。既に当山十一面の応化なれハ。高祖大師も随て然るへきこと勿論也。ことに大師の本地十一面なることハ。曾てみつからの玉へり。御聖の<sup>(18)</sup>

と、天照大神の別名が日徧（＝遍）照尊といい、大師の金剛名号である遍照金剛と意味の上で同体である証拠という。さらには弘法大師が、天照大神より直に神道の奥旨を授かつたのが、「御流神道」と称するものであるとする。そして、天照大神は、長谷寺の十一面観音の応化身であれば、大師の本地が十一面観音となることと述べている。

次に『豊山玉石集』では、この本地に関する以下の様な問答が示されている。すなわち、天照大神の本地が、大日如来といい、観音菩薩というのは神勅であるが故に、甚深殊勝なる旨である。しかし、長谷寺の観音像とすることは、些か疑問が生ずるといふ。長谷寺の観音像が顕現したのは、第四五代聖武天皇の御代である。天照大神が伊勢の「神乳山」にて生まれたのは「天神七代の末」であるため、おおよそ二百四十万余年前となる。よつて、前に生まれた皇大神が、後に顕現した観音菩薩の化現といふのはどういふことか、という疑問である。これに対して、

当山ハ常住三世淨妙法身大日如来の淨土也と。大日如来ハ。喩ハ日月のことく。観世音ハ大日如来大慈悲の徳用なれハ。光明のことし。日月・光明共に無始無終・不生不滅・本有本覚の仏身也。神道に是を過神といひ。常世大聖といひ。久在神といひ。又ハいまだ天地始らざる先より世間に在といふ。此常住不變の真身をさして。皇大神の御本地といふなり。此真身ハ凡人の拝見することあたはざる尊容なれハ。是を模

して靈木を刻み顕し奉る也。（中略）此靈木を刻み奉る像ハ仏の応身に属す。機縁に隨て。生滅隱顯有。此像を天照神の御本地といふにハあらず。繪木等の形像ハ応身にして真身にあらずといへとも。迷人に親き事ハ真身にも勝るか故に。衆生濟度の利益ハ形像の尊返て真身にも勝れ玉へり。況や又真実・形像異也といふハ。凡夫の謂情。淺教の意なり。真言教の意ハ。形像即真実と談するか故<sup>(19)</sup>。

ここでは、密教の仏身觀に基づいて、大日如来・觀音菩薩像と天照大神を捉えている。先ず、大日如来の慈悲の徳用が觀音菩薩であり、その真身を凡夫は拝見することがかなわなかったため、靈木を刻して仏像として顯している。そして、この觀音像は応身であり、機縁に応じてその姿を現したものであり、この觀音像を以て天照大神の本地とするのは、誤りである。

しかし、真身と繪木等の形像が異なっていると考えるのは凡夫であり、「真言教の意は形像即真実」「真身形像、をのつから冥合して不二一体」と考えるのであり、觀音像は真実身であるともしている。よつて、一面において形像の觀音菩薩像を以て論ずるべきではないが、前述のような真言密教の深意としては、形像を以て直に皇大神の本地とすることに妨げはないとしている。

以上のような長谷寺に対する密教的解釈が成立するのは、弘法大師が入唐の上で八祖相承の真言密教を日本に伝えて以降と考えるのが、真言宗の常套であろう。しかし、これまでみてきた解釈は、大師入唐以前に密教が古来より日本に存在していたということが前提となつている。このことについて『豊山玉石集』では、先ず天照大神即大日如来といふことから解き明かしている。『神祇本紀』において、天照大神のことを、大日靈尊<sup>おほひのめみこと</sup>・日遍照大神・月夜見尊・月遍照大神と表現されていることを述べた上で、伊勢皇大神宮の内宮・外宮を日・月

として、日遍照尊・月遍照尊と天照大神が称されていることから、内宮を胎藏大日如来・外宮を金剛界大日如来に配当している。さらに、『豊山玉石集』では信怨能化の書き入れかと疑問を呈しながらも、次のような記述が示されている。

内宮は胎藏界因曼荼羅三部。外宮ハ者果漫荼羅五部也。秘口決。大日ノ本国ナレハ。大日本トイふ也。<sup>(20)</sup>

このように、伊勢神宮の内宮外宮を配当している。さらに、大日と遍照という言葉は、言葉は異なっているが意味合いは同じであるため、大神を大日ともいい、遍照ともいい、また、天照と遍照は「和訓既に同じくあまてらす」と、天照大神と大日如来が同体であることを示している。

次いで、この大日如来即天照大神の所以を以て、

神仏二道。本来不二なることを。されは伊勢皇大神社内。昔より真言三部の秘経有。浄覚律師拝見し玉ふに。善無畏三蔵所訳の本と異なることなかりしとかや。寔に密教ハ我が(21)『統豊山全書』では「本」、大正六年本では「我が」朝本有の経也といふも宜ならずや。

と述べ、善無畏三蔵所訳の経と伊勢皇大神社内の「真言三部の秘経」が同本であるという。ここでいう善無畏三蔵所訳の経とはおそらく『大日経』等々の経典のことを指しており、弘法大師の久米寺での『大日経』感得の伝承を想起させよう。ここでは、少なくとも密教経典が「昔より」伊勢皇大神宮内に所蔵されていたとが述べられており、かつまた善無畏が翻訳した経典と所蔵されていた経典が同一であることを示すことによつて、

「密教ハ我が朝本有」のものであることを正当化している。これは、とりも直さず日本に大師請来以前に確かに密教が存在していたことを物語っている。

続いて、『豊山玉石集』では観音像の前に天照大神（≡雨宝童子）と春日明神（≡難陀龍王）が「両夾侍」となっている理由を示している。すなわち、

本縁起に。天照大神法性宮に在して。春日明神と契りて君臣となり。此土の塵に交り玉ふといふ。法性宮ハ即当山なり。大日如来・釈迦・薬師・地藏・観音等の諸尊と議り玉ふて。日月星等の形を現し玉ふ也。故に当山の一名を日出山という。（中略）初瀬の里人古来語り伝ひて。日輪は当山より出で玉ふといふ。当山観音。天照・春日夾侍とし玉ふ深旨。仰ぎ観奉るへし。<sup>(22)</sup>

と、『長谷寺縁起』に述べられている天照大神と春日明神による「汝と共に日域にあまくたりて。我は国王となり。汝は臣下として彼土の衆生を利益」するという契りを前提に論述されている。そして、この引用文に示されている「法性宮」が長谷寺であるとし、長谷寺の異名を「日出山」と称され、日輪が長谷寺から登として、以上のように、『豊山玉石集』の撰者である祐庵は、長谷寺を「大日如来の浄土」「密教国土」にして、「天照大神本有常住の霊場」であることを、『長谷寺縁起』を前提にして説明をおこなっているのである。それは、

豊山ハ即秘密莊嚴の地。金胎両部の大日如来の浄土なる事。本縁起の旨分明なり。密教相応の霊場。何れの処か是に増らん。<sup>(23)</sup>

と述べていることから明らかである。さらに、

開山徳道上人既に求聞持の法を修して。其成就を得玉ひ。証驗 高祖大師も百日籠り居て。密教の弘通を祈らせ

玉ひ。八祖相承の舍利一粒。観音菩薩の御頭の中に納め玉ふ。古東寺の記 并是後に密教弘通の本山となるへき

奇瑞を示す者歟。(24)

ここでは、徳道上人が虚空蔵菩薩求聞持法を修していること、弘法大師が長谷寺に百日参籠し、さらに観音菩薩像の頭部に恵果和尚より授かったとされる仏舍利一粒を納めているとことを明かし、これによつて長谷寺が「密教弘通の本山」であることを示している。ここであえて言及すれば、長谷寺において弘法大師は百日参籠したとあるだけで、求聞持法を修したとは示されていない。しかし、いわゆる行間を読むということからすれば、大師も求聞持法を長谷寺において修したと解釈してもあながち間違いと退けることはできないであろう。そして、長谷寺が密厳浄土であるならば、本尊観世音は大日如来であり、そのため密教興隆は祈らずとも叶うとする。さらに加えて、弘法大師が百日観音菩薩に熟祈していることから、観音菩薩は密教興隆の願いを納受しているとも述べている。

さらに別の証として、高野山復興をなした祈親上人（九五八〜一〇四七）の伝承をあげている。

当山観自在菩薩の教示に依て。祈親上人高野山に登り。二親上生親率の消息を感じし。所願を満足し。大師の加持力を感じ。再たひ山を下らす。諸伽藍を造立し。南山を中興し玉ふ。(25)

と高野山復興に尽力した祈親上人の伝承を挙げている。すなわち、祈親上人が長谷寺の観音菩薩のお告げによつて、高野山に登り、復興を果たしたという伝承について、その観音菩薩の夢告が必然であったことを示している。これは、観音菩薩が密教興隆に大きく寄与している証左を示し、観音菩薩は密教興隆の願いを納受していることとの確証とされていると考えられる。さらに、観世音菩薩は、専誉の出生にも次の様に関わっているという。

観自在尊予め根山の廃せんことを知見し玉ふて。彼山の法流。此長谷川に溢れ。法水漫々として密宗の総本山となさしめ玉はんか為に。専誉僧正を出生せしめ給ふなるへし。<sup>(26)</sup>

と、観自在菩薩によつて根来寺の焼き討ちは予見されており、焼き討ち後に、専誉によつて根来の法流がこの長谷寺に伝わり寺運は隆盛となつた。このように根来焼き討ち後に、長谷寺を「密宗の総本山」となすがために、長谷寺の観音菩薩の計りとして、専誉を出生せしめたとしている。

そして、その専誉の位置づけを『豊山玉石集』では次の様に述べている。

此に先是（＝専誉僧正伝）を載ることハ。当山中興。真言新義の本山となる来由をしらしめんが為なり。<sup>(27)</sup>

すなわち、専誉を長谷寺中興とし、長谷寺を「新義の本山」とならしめた人物という簡潔ではあるが、明確な位置づけを示している。この専誉のいわば業績、長谷寺の中興と新義教学の学山とならしめたことによつて、

大悲の威光ハ日を追てさかに。法の花ふさ年々に色をそへ。ありふる鈴の音ハ二六時中に清く渡り。文

よむ窓の燈ハ山上・山下にかゝやきあひ。大悲の法衆を増し。天下の昇平を祈る。<sup>(28)</sup>

という具合に、『豊山玉石集』執筆当時における学山・長谷寺の隆盛を表現している。

さらに『豊山玉石集』では、長谷寺が密教相応の地であることを虚空蔵菩薩求聞持法を以て示そうとしている。求聞持法の典拠とされる儀軌は、『虚空蔵菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法』であり、善無畏によつて訳出されたものである。善無畏三蔵はシルクロード經由で、中国に開元四年（七二六）入り、その翌開元五年に西明寺で当該儀軌を翻訳している。善無畏三蔵の代表的翻訳經典である『大日經』は善無畏三蔵晩年の開元十二年（七二四）に訳出されていることから見れば、『虚空蔵菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法』の訳出の早さが知られる。

そして、幸いなことに善無畏三蔵に指事していた可能性が指摘されている大安寺の道慈（？〜七四四）が、養老二年（七一八）に日本に当該儀軌を請来している。

弘法大師が請来、あるいは構築した真言教学や密教修法を受け入れる素地は、求聞持法の儀軌が大師誕生以前に日本に請来されていること一つをとつてしても、奈良時代よりすでに形成されていたとされている。弘法大師の著作である『三教指帰』冒頭には「ここに一人の沙門あり。余に虚空蔵求聞持の法をしめす」とあり、弘法大師が中国に渡る前に虚空蔵求聞持法という密教の修法が日本において修されていたことが示されている。無論、現在の虚空蔵求聞持法（いわゆる現在真言宗で修されている虚空蔵求聞持法）と弘法大師が「一沙門」から授けられたとされる虚空蔵求聞持法が同一である可能性は高いとはいえないが、弘法大師自身が密教修法を中国に渡る以前に受法していたことを、自らの著作の中で述べていることは、日本密教の展開を考える上で非常に重要視すべき事項である。

虚空蔵求聞持法について、弘法大師は『三教指帰』の冒頭において、ある沙門より当該法を授かり、徳島県・大滝嶽や高知県・室戸岬で修したと述べられている。さらに『三教指帰』では、善無畏訳『虚空蔵菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法』を引用し、虚空蔵菩薩の真言を一百万遍称えれば、一切の教えの文義を暗記することができるといふ機能をも示している。

この虚空蔵求聞持法の初伝とされるのは、前述のごとく大安寺の道慈（？～七四四）である。道慈は、大宝元年（七〇二）に入唐し元康から三論教学を、『虚空蔵菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法』の訳者である善無畏から密教を学び、養老二年（七二八）に帰朝、大安寺に住したという。この大安寺は、多くの渡来僧や学問僧が止住した寺院である。すなわち、律・華嚴・禪・天台に通じた唐僧の道躋、華嚴と呪術に通じたとされる天竺僧の菩提僊那、新羅の学僧の審祥、鑑真の弟子で天台と律に通じた思託などが、大安寺に止住している。このように、大安寺には官寺の筆頭寺院という寺格に加え、多くの渡来僧によってもたらされた儀礼・教学が研究されていたという重要な側面を持ち合わせている。

求聞持法に関しては、後代の伝承であるが、凝然（一二四〇～一三三二）は『三国仏教伝通縁起』において「道慈、真言の法を善議・慶俊に授け、善議が勤操僧正に授け、勤操、求聞持の法を弘法大師に授く」と示され、道慈―善議―勤操―弘法大師という大安寺や三論宗系譜によつて、虚空蔵求聞持法が弘法大師に伝わったと考えられている。

この伝承の中で、道慈と弘法大師をつなぐ人物の一人が勤操（七五四～八二七）であるが、その勤操における虚空蔵求聞持法の存在を確認することはできない。しかし、勤操にはその母親が懐妊に際し、明星が懐に入る夢を見たという伝承があり、勤操生前中から、明星の生まれ変わり、すなわち虚空蔵菩薩の応化身として尊崇されていた可能性も指摘されている。さらには、勤操と同時期の法相宗の大学匠・護命（七〇五～八三四）も、『統

『日本後紀』によれば沙弥の頃には月の上半ば深山に入つて虚空藏法を修していたと伝えられている。また、僧侶に限らず、大学生たちが秀才科の貢挙試を受ける際に、文義を理解する知恵を得ようと虚空藏法を修したとされている。

このように、弘法大師入唐以前より虚空藏菩薩求聞持法は請来され、修されていたことは事実である。これを確認した上で、今一度『豊山玉石集』の記述を見ていくと、

無畏三藏唐へ来り玉ふて。最初に此法を訳し玉ひ。本朝へも道慈律師伝ひ来り玉へハ。日本国も密法の最初ハ此法なり。和漢両朝共に。秘密教流布の最初此法なること。あに徒事（『続豊山全書』は「然」。大正六年本で「事」とする）ならんや。<sup>(29)</sup>

と中国・日本ともに、密教流布の第一の法が求聞持法であることを示した上で、

開山徳道上人。瀧藏の麓にて求聞持一印の法を修し。神亀五年五月十五日夜。明星天子石上に降り。壇上に天の甘露を感得し。聞持成就を得玉へり。<sup>(30)</sup>

と徳道上人が「瀧藏の麓」において、求聞持法を修していたことが述べられている。この「瀧藏」とはおそらく「瀧藏社」のことであり、『豊山玉石集』では諸堂社の縁起を述べる中で「瀧藏三社権現」として次の様に紹介している。

延喜式神名帳にハ。瀧蔵大菩薩といふ。此神に三社有。第一御殿ハ新宮権現。第二殿ハ瀧蔵権現。第三殿は石像。（中略）三社別なれ共。惣て瀧蔵権現といふ。瀧蔵講式曰。新宮は女体。柔和の姿なり。本地ハ葉師如来。瀧蔵ハ老父の形。本地虚空蔵菩薩。石像ハ比丘の形。本地地藏菩薩也。神武天皇御宇。明星天子瀧蔵の絶頂に降て鎮座し玉ふ。<sup>(31)</sup>

このように瀧蔵権現の有様について紹介しており、ここで注目すべきは、三社あるうち、第二殿が瀧蔵権現であり、その本地仏が虚空蔵菩薩であり、明星天子が瀧蔵社の地に降臨したことが述べられている。そして、このことをもとに、

瀧蔵権現ハ明星天子の応化にて。当山の地主なれハ。当山ハ是南方宝部虚空蔵尊の山也。<sup>(32)</sup>

としている。これは虚空蔵菩薩の眷属、あるいは化身が明星天子とされていることから、瀧蔵権現＝明星天子＝虚空蔵菩薩という配当がなされ、その流れの中、虚空蔵求聞持法が論述されていくのである。

『豊山玉石集』では、「神鏡広博記第八卷。勢州涌福智山国東寺縁起」の中に示されている求聞持法の霊場三十三箇所の名称をすべて挙げて示している。その三十三箇所の中で、「最上の勝地」たる場所が「舎梨山」として示されており、この「舎梨山」が長谷寺としている。そこで、なぜ長谷寺が「求聞持修行最上の勝地」とされるのか、その理由が様々『豊山玉石集』では論じられている。すなわち、長谷寺は秘密莊嚴の霊場、両部大日如来の浄土であり、観音・大日如来は普門一門の関係にあるため、何れの法を修するも最上の地であることはあきらかであると述べ、

曾て神鏡広伝記と題せる秘記を見侍りしに。第八巻に。高祖大師曰。虚空藏尊を信仰せざれば。観自在尊の利生を蒙り難し。観世音に帰依せざれば。虚空藏尊の福智を得難しといへり。思ふに当に深き理あるべし。凡情をはかり難きことなり。当山観音を信仰する者ハ。たとひ虚空藏尊帰依の心なしといふ共。宝部の山に入り。宝塔・宝石の功德に照らさるゝ故に。観音の感応に預り易かるべきこと。思ひみるへし。当山の大悲者。靈験餘尊に超玉ふも。むへならずや。又当山に於て聞持修行の者。観音を信するハ勿論なれば。聞持成就し易かるべきこと必定なり。<sup>(33)</sup>

とされている。『神鏡広博記』というテキストの第八巻には、弘法大師が語られた内容が示されている。すなわち、求聞持法の本尊である虚空藏菩薩を信仰すれば、観音菩薩の功德を得る事は難しく、逆に観音菩薩を信仰すれば虚空藏菩薩の福智の功德をえる事は難しいとされている。しかし、大師は長谷寺の観音菩薩を信仰すれば、たとえ虚空藏菩薩への信仰がなくとも、宝部の山に入り、宝塔・宝石の功德によつて、観音菩薩の感応に預かり易いのである。これは、先にみた瀧藏権現が明星天子の応化身であり、長谷寺の地主神であることから、長谷寺が「南方宝部虚空藏尊の山」と位置づけられていることを基にしている考え方である。さらに、「長谷寺の大悲」は他の尊格を超えているという。それ故に、長谷寺において観音菩薩を信仰する者はもちろん求聞持法を成就することが容易いとしている。ここでは言及されていないが、徳道上人が求聞持法を修し、百日弘法大師が参籠した長谷寺が、虚空藏菩薩と観音菩薩の二尊の功德を受けられる勝地であることを裏付けていよう。

そして、『豊山玉石集』の撰者は『神鏡広博記』というテキストに示されている求聞持法の三十三箇所の霊場について、次の様に分析している。

其三十三処をみるに過半ハ本尊十二面尊。鎮守白山権現の山なり。白山権現八面  
十一面の垂迹其外ハ本尊文殊等。鎮守弁財天等なり。弁財天十  
一面の垂迹上來の意を以見るへし。あに当山ハ聞持修行最上の道場にあらすや。<sup>(34)</sup>

と三十三箇所霊場の本尊の過半数が十一面観音であり、鎮守が十一面観音の垂迹とされる白山権現や弁財天となつてゐることを指摘し、長谷寺が求聞持法成就に関して最上の地であることをここにおいても示している。

そして、その求聞持法について、『豊山玉石集』では次の様な概念を示している。すなわち、

聞持法ハ一印法にして。以て不二の奥旨を顕す一印なり。（『統豊山全書』では「奥旨を顕す。一印にしたる」大正六年本で改める。以下同じ）初心の徒も修し易しといへとも。成就を得る時ハ即両祖の如く。自証化他。是に究極す。初地即極の秘法と謂つべし。（『統豊山全書』では「可謂。初地即極の秘法是なりと」嗚呼。兩部不二の山にして。迷悟不二の法を勤念す。あに觀行応理にあらすや。其の成就し易かるべきこと。自思ふて知ぬへし。（『統豊山全書』は「自思ふて」なし）<sup>(35)</sup>

と求聞持法が一印法であり、その一印が不二の奥旨を示しているという。かつまた、初心の者でも修しやすく、弘法大師や興教大師のごとく悉地を得られるという。求聞持法の一印が不二の奥旨を示すことから、兩部不二の山である長谷寺での求聞持法の成就是容易いとしている。ここにおいても、長谷寺が密教相応の地であることを、求聞持法によつてあきらかにしようとしていることが読み取れよう。また、

一、求聞持の法ハ密宗の徒必修習すへ事。

予昔年ある闍梨に就て受法しける時。闍梨示曰。此法ハ愚を転して智となすの神丹。貧を改て富となすの妙術なり。真言行者ハ別して福智兼備せされハ。二利の大願成就し難し。故に真言門に入る者ハ最初起步の時。先此法を修して無始の業障を滅し。福智の資糧を貯ふへし。始終一印の作法なれハ。童子の時にも勤めやすし。<sup>(36)</sup>

と求聞持法が「愚を転して智となすの神丹。貧を改て富となすの妙術」であり、一印であるから、童子にも修し易いため、真言行者は最初において修すべきものであるとしている。さらに、『豊山玉石集』は続けて弘法大師は「進士たりし時。教廻勤念して悉地」を得ており、また興教大師も八回求聞持法を修して一切智を得たとして、「この深理を後弟に知らしめんため」に数多く修しているとしている。

このように、『豊山玉石集』は求聞持法について、その修法の概念や長谷寺が求聞持法を修するに最適の地であることを様々述べてきているが、これらの祐嚴の論述に対して信恕は、次の様な評価を示している。

信恕僧正奥書

求聞持の法。我道の秘要なるかや。よく詳かにしるして。此巻をみんなのはいやましに信を増して修行し。愚迷を転し聖智を得るならん。作為の広大なるかな。至れる哉。はやく刊板して諸徒を助補すへし。<sup>(37)</sup>

と祐嚴によって示された求聞持法が、ことのほか要領を得て素晴らしいと讃嘆している。そして、早く開版することを望んでいる。

#### 四、結びにかえて

以上、祐嚴の手による『豊山玉石集』を通して、長谷寺における密教との関連性を概観してきた。

ここで浮かび上がってくるのは、長谷寺の地が天照大神との関連を古より有しているということである。「初瀬の里人古来語り伝ひて。日輪ハ当山より出玉ふといふ」という件は、まさに長谷寺が大和国で最初に太陽が昇ってくる処であり、別名を日出山と称したり、天照大神が天上から初めて地上に降り立った聖地であるという、特別な地であることが前提とされている。この中で、神である天照大神と仏である大日如来が同一であり、また普門一門の関係から大日如来と長谷寺の観音菩薩も一体であるという。そのため、大日如来を介して、天照大神と長谷寺の観音菩薩も結びつきが成立し、天照大神に関する聖地は、そのまま大日如来の密厳国土であり、両部曼荼羅世界であるということが示されてきた。これを偈頌の形で示したのが、

我本秘密大日尊　大日日輪觀世音

觀音化日天子　日天權迹名日神

此界能救大慈心　所以示現觀世音<sup>38</sup>

となろう。ここでさらに虚空藏菩薩である日天子を登場させ、かつまた日輪が大日如来を示すことは無論であるが、弘法大師の御影の一式である日輪大師が大日如来と弘法大師の合一を示したものとこの解釈を示すことによつて、すべてを同一・同質のものであると結びつけている。

また、虚空藏菩薩の求聞持法に関しては、長谷寺がその勤修には最適な地であること、すなわち密教相應の地であることを、求聞持法によつて証明しているのである。この求聞持法だけではなく、様々な事柄を示して、

いかに長谷寺の地が密教相應の地、「密宗の総本山」「密教弘通の本山」であるかを論証しているのが、『豊山玉石集』である。

そして、その密教について『豊山玉石集』では、弘法大師が入唐求法以前より密教が日本にそもそも存在しているとする。「伊勢皇大神社内に。昔より真言三部の秘経有」「密教ハ我が朝本有の経」と述べるように、密教が古来より元々あると述べている。これは、大日如来と同一である天照大神のもとには、大日如来の経典が本来的に有る、本有であるという立場であろう。本論で見たように、大師入唐以前に、密教の修法の一つである求聞持法は道慈によつて請来されている。その意味では、密教は大師が請来する以前に日本には存在していたと言つてよいであろう。しかし、それを当時の人々が密教であると認識していたかは、また別の問題である。なぜならば、密教を請来し、最初に概念規定したのが、弘法大師であるからである。よつて、密教教理史からすれば、大師帰朝以前に密教的なものは日本にはあつたと表現するのが妥当であろう。この意味からして、長谷寺において大師帰朝以前において、求聞持法が修され、密教相應の地・「密宗の総本山」「密教弘通の本山」とされることは許容の範囲であろう。そうすることによつて、専誉によつて中興されたとする密教寺院たる長谷寺が、新義の本山たりうることは至極当然の流れとなつてくるのである。

いづれにせよ、祐嚴、そして信恕は強い思いを以て『豊山玉石集』を執筆していることには違いない。自らの祖山を誇りに思い、遠き古より密教相應の聖地としての長谷寺を人々に理解してもらい、護持し続けていくことを読み手に訴えているものが、『豊山玉石集』である。

#### 註

(1) 大正六年出版『豊山玉石集』所載・第一回 著者祐嚴像の付言。頁数記載なし。

(2) 『統豊山全書』一八・三一・上

- (3) 『豊山全書』一八・二五三〜二六〇
- (4) 『統豊山全書』一八・三〇四・上
- (5) 『統豊山全書』一八・七八・上〜下
- (6) 『統豊山全書』一八・四・下〜一三・下
- (7) 『統豊山全書』一八・一五・上
- (8) 『群書類從』一・七六・下〜七七・上
- (9) 『統豊山全書』一八・二八・上
- (10) 『統豊山全書』一八・上〜下
- (11) 『統豊山全書』一八・二二・下
- (12) 『統豊山全書』一八・二八・下
- (13) 『統豊山全書』一八・二一・上
- (14) 『統豊山全書』一八・二八・下
- (15) 『統豊山全書』一八・二〇・上
- (16) 『統豊山全書』一八・二二・下
- (17) 『統豊山全書』一八・二三二・下〜二三三・上
- (18) 『統豊山全書』一八・一三三・上
- (19) 『統豊山全書』一八・二一・下〜二二・下
- (20) 『統豊山全書』一八・一九・下
- (21) 『統豊山全書』一八・二〇・上
- (22) 『統豊山全書』一八・二〇・下
- (23) 『統豊山全書』一八・二八・下
- (24) 『統豊山全書』一八・二八・下

- (25) 『統豊山全書』 一八・二九・上
- (26) 『統豊山全書』 一八・二九・下
- (27) 『統豊山全書』 一八・二六・下
- (28) 『統豊山全書』 一八・三〇・上
- (29) 『統豊山全書』 一八・四二・下
- (30) 『統豊山全書』 一八・三七・下、三八・上
- (31) 『統豊山全書』 一八・三三・下、三四・上
- (32) 『統豊山全書』 一八・三六・下
- (33) 『統豊山全書』 一八・三七・下
- (34) 『統豊山全書』 一八・三八・上
- (35) 『統豊山全書』 一八・三九・下
- (36) 『統豊山全書』 一八・四二・上
- (37) 『統豊山全書』 一八・四四・下
- (38) 『統豊山全書』 一八・一八・上